

第4回サステナブルデザイン国際会議

# Destination 2023

デスティネーション2023

The 4th International Conference of Design for Sustainability

## 報告書

Report



photographed by Hiroshi Homma

Destination  
2023

### テーマ 社会イノベーション進行形 / Social Innovation-ing

環境だけでなく、社会全体が曲がり角に来ている。あらゆる意味で私達は岐路に立っている。そこには従来とは全く異なる発想、革命的なアクションが必要である。今回は、テーマを「社会イノベーション進行形 / Social Innovation-ing」と掲げ、イノベーションを進めるに当たっての私達の足下を見つめ直すとともに、若者達が取り組むサステナブルなビジネスモデルの事例発表を通じて、社会変革とサステナブルデザインの可能性をより身近に感じようという目的で開催した。

# 第4回サステナブルデザイン国際会議

## Destination2009-2023 報告書

### はじめに

#### 行動するサステナブルデザインを求めて

去る3月、第4回目となるサステナブルデザイン国際会議を開催し、お陰様を持ちまして大盛況の内に終了することができました。

本会議は、サステナブルな社会づくりを目的とした会議です。その起点は環境問題が大きなきっかけであったことは確かですが、回を重ねる毎に、議論のテーマは我々の考え方や暮らし方、文明、文化の問題へと広がっています。我々は、グローバルな関係性の問題を考慮すると同時に、各地域毎の差し迫った問題をも解決してゆかねばなりません。資源エネルギーのあらゆる消費によって経済価値が生まれるという現代文明の因果関係を断ち、新しい価値観に基づいた、より自然な暮らしを実現する必要があります。

そうした社会の変革に、デザインはどのように関わってゆくのか。そうしたプロジェクトを起こすにせよ、参加するにせよ、いずれにしても今までのような狭いデザインの専門性では対処できません。これから、デザインは様々な関連領域との関係を強化しながらも、自らの専門領域を開放し、その一般化を図ってゆく必要があります。現在、一部の産業に偏在しているデザインの人材とノウハウを、大企業から中小企業へ、大都市圏から地方へ、経済先進地域から開発途上地域へ、供給側から需要側へと社会に広く敷衍し再編成することによって、皆で知恵を出し合いサステナブルな社会をデザインする体制を整えてゆかなければなりません。

今回の会議では、「社会イノベーション進行形」ということをテーマに掲げ、自分達の足下を見つめ直すことを通して、目指す方向がより明らかになったと思います。

今回は会議の企画・運営に多くの若い方々に加わって頂いたこともあり、若い世代を中心に初めて参加される方も増え、大変心強く思います。参加頂いた皆さんのこれからの活動に大変期待しています。

2010年6月  
サステナブルデザイン国際会議  
実行委員長 益田 文和

#### もくじ

- 02 はじめに / もくじ
- 03 サステナブルデザイン国際会議  
開催の経緯と現在まで
- 04 開催概要 / 実行委員会委員名簿 /  
後援・協賛・協力
- 05 プログラム / テーマ / 開会にあたって

#### 3月13日

##### 基調講演会「社会イノベーション・フォーラム」

- 06 第1部 社会イノベーションとは?  
基調講演「犬と鬼」アレックス・カー
- 08 第2部 実践・社会イノベーション  
講演1「持続可能なライフスタイル価値  
の創造」熊野 英介
- 09 講演2「リサイクルから第二資源という  
視点」黒崎 輝男
- 10 講演3「自分を生きる?」西村 佳哲
- 11 第3部 総括「基調講演会を振り返って」  
益田 文和

#### 3月9～13日

##### 関連イベント

- 12 交流会「サステナブルデザイン国際会議  
× PechaKuchaNight」
- 13 前夜祭「Designers Accord Tokyo Town Hall」  
展示会「2023年のサステナブルデザイン  
展」 / 「エコデザインマテリアル展」

#### 3月14日

##### 分科会「社会イノベーション×デザイン」

- 14 セッション1「地方・農業×デザイン」
- 15 セッション2「共有×デザイン」
- 16 セッション3「連携×デザイン」
- 17 クロージングセッション  
「Destination2009-2023 を終えて」

- 18 開催告知・報告媒体 / 英語レポート
- 19 English Report
- 20 次回告知 次回、山形にて開催

■ 本会議報告書、及び過去に開催した会議の報告書は、下記ホームページにて公開しています。

[www.sustainabledesign.jp](http://www.sustainabledesign.jp)

■ For English Information, please see our web site.

[www.sustainabledesign.jp/e/](http://www.sustainabledesign.jp/e/)

## サステナブルデザイン国際会議 開催の経緯と現在まで

世界の生産と消費の規模が急速に拡大する中、地球規模の大きな自然環境の変化が起きていることが報告されている。私達の経済活動の拡大が私達の生活の物理的豊かさや利便性を高める一方で、私達を含む生物の存在環境条件を悪化させる原因となっていることも指摘されている。1990年代以降、世界各国でこれに対して様々な対応策が講じられ、日本でもこの10年間、ものづくりにおける環境効率の向上を図るため、技術者を中心に産官学をあげて熱心にエコデザインに取り組み、数多くの素晴らしい環境性能を持った製品を生み出してきた。

しかし、個々の製品は優れた成果をあげているにも関わらず、地球環境は依然として改善されないどころか悪化の一途をたどっている。環境と共生しながら今後何世代にもわたって続けてゆくことのできるサステナブルな社会を実現するには、生産に関する技術的課題を解決するだけでは不十分なのである。生産と消費は表裏一体であり、生産の質と規模を適正化すると同時に、消費をも適正規模に是正しつつその質を高める必要がある。消費は個人行為である以上に社会・経済的、文化的な活動であるため、技術革新を進めると同時に、『社会意識改革』を引き起こすことが不可欠で、それによってはじめてサステナブルな社会の実現に繋がるのである。

私達が日々の仕事としているデザインという行為は、機能・形を美しく整えることがその本質ではない。人と人、人と物との関係を考えてものやサービスを作る仕事であり、新しい価値観の提示を行う行為である。

私達も自分達の得意とする分野から、積極的に関わろうとの思いから、2006年よりサステナブルデザイン国際会議を開催している。開催時、目標として掲げた20年後の未来であるが、本会議では、目標の達成に向かって加速度的に仕事を速める必要から、毎年目標の年を繰り下げてきている。このままゆけば現在地と目標とが2016年で合致する。2016年は、地球温暖化のチッピングポイントとも言われている。

2016年までに達成すべきサステナブルな社会における私達の暮らしは、一体どのようになっているのだろうか。その目標に接近する活動を報告し、確認し合うために本会議を開催しているのである。

photographed by The International Conference of Design for Sustainability



1 第1回会議でのエツィオ・マンズイーニ氏講演の様子。2 第2回会議で描いた到達すべきサステナブルな社会の姿絵巻「エコイノベーションで実現するサステナブルなライフスタイル 2025」。3 第3回会議では「サステナブルデザイン行動宣言」が参加者の署名により採択された。

### 第1回サステナブルデザイン国際会議 Destination2006-2026

テーマ: **Finding a way to a Sustainable Society**  
サステナブル社会へのロードマップを探す

■ 内容: サステナブルデザインに関わる様々な領域からの発表を通じ、細分化されたデザイン専門領域を超えた統合的デザイン活動を開始することが火急の課題であることを確認し、「サステナブルデザイン宣言」を採択した。■ 講師: 赤池学、井口浩、池上俊郎、石田秀輝、植松豊行、エツィオ・マンズイーニ (イタリア)、加藤公敬、川原啓嗣、黒崎輝男、ジャッキー・デーデン (イギリス)、ティ・ケーン・スーン (シンガポール)、フィリップ・ホワイト (アメリカ)、フランソワ・ジェグ (フランス)、益田文和、マリヤ・シシリヤ・ロスキャポ (ブラジル)、山本良一 ■ 会期: 2006年12月14~16日 ■ 会場: 東京ビッグサイト (エコプロダクツ2006) ■ 参加者数: 267名 (内海外より32名) ■ 主催: サステナブルデザイン国際会議実行委員会 ■ 共催: 国際機関 APO (アジア生産性機構)

### 第2回サステナブルデザイン国際会議 Destination2007-2025

テーマ: **Drawing a land map of a Sustainable Society**  
サステナブルな社会のランドマップを描く

■ 内容: 世界遺産白川郷を会場に、到達すべきサステナブルな社会の姿を描いた。成果は絵巻物「エコイノベーションで実現するサステナブルなライフスタイル 2025」として編纂し、「地球温暖化に関する総理懇談会」にて山本良一組織委員長より総理に提出。■ 講師: 山本良一、谷口尚 (白川村村長)、黒崎輝男、アーネスト・ヤン・ヴァン・ハッタム (スイス)、シンギー・カルトノ (インドネシア) ■ 会期: 2007年12月21~23日 ■ 会場: トヨタ白川郷自然学校 (岐阜県) ■ 参加者数: 115名 (内海外より12名) ■ 主催: サステナブルデザイン国際会議実行委員会 ■ 共催: SPEED研究会、国際ユニヴァーサルデザイン協議会

### 第3回サステナブルデザイン国際会議 Destination2008-2024

テーマ: **Steer toward Sustainable Society**  
サステナブルな社会に向けデザインの舵を切る

■ 内容: 「行動するデザイン」のあり方を議論し、「サステナブルデザイン行動宣言」を採択。■ 講師: 星川淳、トム・ジョンソン (アメリカ)、ラッセル・ケネディ (オーストラリア)、アリス・シエリン (アメリカ) ■ 会期: 2008年12月7~9日、12日 ■ 会場: 港区立エコプラザ、東京ビッグサイト ■ 参加者数: 177名 (内海外より11名) ■ 主催: サステナブルデザイン国際会議実行委員会 ■ 共催: 学校法人桑沢学園 (東京造形大学、東京造形大学大学院、桑沢デザイン専門学校)、港区立エコプラザ

## 開催概要

名称： 第4回サステナブルデザイン国際会議  
Destination 2009-2023

会期： 2010年3月9日（火）～14日（日）

会場： [9日～13日]  
桑沢デザイン研究所 1F ホール  
150-0041 東京都渋谷区神南 1-4-17 [www.kds.ac.jp](http://www.kds.ac.jp)

[12日、14日]  
東京ミッドタウン・デザインハブ  
インターナショナル・デザインリエゾンセンター  
107-6205 東京都港区赤坂 9-7-1 ミッドタウン・タワー 5F  
[www.designhub.jp](http://www.designhub.jp)

言語： 12日前夜祭＝日本語、13日基調講演会＝日英同時  
通訳、13日交流会・14日分科会＝ウイスパリング

参加者数：のべ208名（内海外より8名）

主催： サステナブルデザイン国際会議実行委員会

共催： 学校法人桑沢学園（東京造形大学、東京造形大学大  
学院、専門学校桑沢デザイン研究所）

## 実行委員会委員名簿

サステナブルデザイン国際会議実行委員会

実行委員長：

益田 文和（東京造形大学教授）

実行委員：

久下 玄（tsug.llc）  
酒井 良治（財団法人日本産業デザイン振興会）  
島津 洋平（有限責任事業組合サステナブルプロジェクト）  
津田 和俊（大阪大学大学院工学研究科特任研究員）  
本田 圭吾（専門学校桑沢デザイン研究所 専任教員）  
柳澤 大樹（Edgy Japan）

## 後援・協賛・協力

後援： 環境省、経済産業省、社団法人産業環境管理協会、  
社団法人日本広告制作協会、社団法人日本インダス  
トリアルデザイナー協会、社団法人日本インテリア  
デザイナー協会、社団法人日本クラフトデザイン協  
会、社団法人日本グラフィックデザイナー協会、社  
団法人日本サインデザイン協会、社団法人日本ジュ  
ウリーデザイナー協会、社団法人日本ディスプレイ  
デザイン協会、社団法人日本パッケージデザイン協  
会、財団法人日本産業デザイン振興会、特定非営利  
活動法人グリーンマップジャパン、特定非営利活  
動法人バイシクルエコロジージャパン、特定非営利活  
動法人ミレニアムシティ、多摩美術大学、筑波大学、  
東京大学 生産技術研究所、東北大学大学院環境科  
学研究科、町田ひろ子アカデミー、立命館大学文理  
総合インスティテュート、国際ユニヴァーサルデザ  
イン協議会、日本デザイン学会、日本デザイン機構、  
ネイチャーテック研究会、ユニバーサルデザインコン  
ソーシアム、有限責任事業組合サステナブルプロジェ  
クト、o2 Global Network Foundation、o2 Japan

協賛： アミタ株式会社、株式会社 INAX、株式会社ウイン  
ローダー、Suitendo、一般社団法人大丸有環境共  
生型まちづくり推進協会、東北芸術工科大学 デザ  
イン哲学研究所、一般社団法人日本デザインコンサル  
タント協会、株式会社日立製作所、富士通デザイン  
株式会社、ブラザー工業株式会社、株式会社モス環  
境設計室、株式会社山武

個人協賛：田中 滋（DEN&A Inc.）、関根 麗（キーデザイン  
スタジオ）、他3名

協力： iaspis、有限責任事業組合エコデザイン研究所、  
PechaKucha-devised by shared by Kline Dytham  
architecture、greenz.jp、株式会社ミチコーポレー  
ション

（五十音順）

## ■ プログラム

### 基調講演会「社会イノベーション・フォーラム」

3月13日（土）10:00～18:00  
桑沢デザイン研究所 1F ホール

- 第1部 基調講演「犬と鬼」アレックス・カー  
第2部 講演1「持続可能なライフスタイル価値の創造」熊野 英介  
講演2「リサイクルから第二資源という視点」黒崎 輝男  
講演3「自分を生きる？」西村 佳哲  
第3部 総括「基調講演会を振り返って」益田 文和

### 分科会「社会イノベーション×デザイン」

3月14日（日）10:00～18:30  
東京ミッドタウン・デザインハブ インターナショナル・デザインリエゾンセンター

- セッション1「地方・農業×デザイン」  
セッション2「共有×デザイン」  
セッション3「連携×デザイン」  
クロージングセッション「Destination2009-2023を終えて」

### 前夜祭「Designers Accord Tokyo Town Hall」

3月14日（日）19:00～21:30  
東京ミッドタウン・デザインハブ インターナショナル・デザインリエゾンセンター

### 展示会「2023年のサステナブルデザイン展」 「エコデザインマテリアル展」

3月9日（火）～13日（土） 11:00～19:00  
桑沢デザイン研究所 1F ホール

### 交流会「サステナブルデザイン国際会議×PechaKuchaNight」

3月13日（土） 18:30～  
桑沢デザイン研究所 1F ホール

## ■ テーマ

### 社会イノベーション進行形／ Social Innovation-ing

環境だけでなく、社会全体が曲がり角に来ている。あらゆる意味で私達は岐路に立っている。そこには従来とは全く異なる発想、革命的なアクションが必要である。今回は、テーマを「社会イノベーション進行形／ Social Innovation-ing」と掲げ、イノベーションを進めるに当たっての私達の足下を見つめ直すとともに、若者達が取り組むサステナブルなビジネスモデルの事例発表を通じて、社会変革とサステナブルデザインの可能性をより身近に感じようという目的で開催した。

## ■ 開会にあたって

13日の基調講演会「社会イノベーション・フォーラム」の開会にあたって、共催である学校法人桑沢学園 小田一幸理事長よりご挨拶を頂いた。また、本サステナブルデザイン国際会議実行委員長益田文和より、これまでの本会議の経緯と目的等をプレゼンテーションするとともに、実行委員会顧問である山本良一氏より、今現在の地球環境状況についてご報告頂いた。

山本氏によれば、地球環境はのびきならない状況にあるという。国際的学会では地球表面温度2℃上昇を危惧している場合ではなく、50年以内に4℃もの上昇の危険が叫ばれている。



## 第1部 社会イノベーションとは？

## 「犬と鬼」

アレックス・カー

／株式会社 庵 取締役会長、東洋文化研究者



## 海外観光客の目に映る日本とは

私の最近の主なテーマは観光です。日本は長年、造船、車、カメラ等の製造業が中心です。観光業を軽視し、観光で稼ぐのは貧しい国と多くの人が考えていたと思います。実際 80 年代終盤までは、そうだったかもしれませんが、共産圏崩壊や金融経済の発展が中国、南米、アフリカを含め世界中に新たな富裕層を誕生させ、それにより観光業が製造業、IT 業、石油業よりもはるかに外貨を稼ぐ時代となりました。残念ながら日本は出遅れてしまったわけです。

数年前、小泉総理が観光立国政策を述べ、2008 年には観光庁ができ、ここ数年、海外から日本への旅行者は増えました。けれども、世界 130 ヶ国中 28 位<sup>\*1</sup>とまだまだ観光で成功しているとはいえません。なぜなのでしょう？ 海外からの観光客にとって日本の風景はどのように見えるのでしょうか？ 山、川、海、田等日本には美しい自然が至る所にあります。そうした日本の国土において、欧米では公共事業には国家予算の約 8～10% 程度なのに対して、日本は約 50% もの国家予算をかけるといった極端な道を走ってしまったのです。

## 土建国家日本、自然を破壊し続けた公共工事の功罪

35 年前、私は慶応大学に留学中、四国を旅しました。その途中訪れた徳島県の祖谷に魅せられ、築 300 年の茅葺き屋根の古民家を購入し、修復し、今も度々訪れています。祖谷は、渓谷にある神秘的な土地であり、平

家落人の隠れ里でもありました。残念ながら、こうした奥まった地域でさえ、コンクリートによる護岸工事が進んでいます。諫早湾干拓事業等の大規模なプロジェクトはメディアに取り上げられますが、祖谷渓谷の場合ように全国各地の小さな工事は取り上げられることはありません。

他の先進国では道路やダムを作る際、いかに自然に影響を与えずに作るかが技術者の腕の見せ所と考えます。しかし、日本の場合は「あの川を補強するためにこれだけのことをやった、これが先端技術だ」ということを表現する場所になってしまいました。

余った予算が定期的に回ってくるため、地質に関係なく、どんな山も同様に同じ角度で削ってコンクリートで覆った「前衛美術作品」が日本全国至る所で見られます。植林にしても同様です。今や日本の森林の 7 割は杉と檜——ほとんどは前者——です。社会のニーズがあって植えられたのではなく、補助金によって植えられたものです。現在、日本は木材の約 9 割を輸入材に頼っているので、どれだけ植林しても活用されず、売れないのです。杉林には生き物も棲めず、手入れも行き届かず土砂崩れの原因となり、景観もパッチワークのようになってしまっています。

想像していた日本の自然のイメージとは全く異なる風景となってしまいました。「国破山河在（国破れて山河在り）」という杜甫の詩がありますが、逆のことが日本で起きている気がします。

## 日本人は日本が見えていない

「犬馬難、鬼魅易けんばむつか きみやす（犬馬難し、鬼魅易し）」という故事が、中国の古典「韓非子」にあり

ます。皇帝が宮廷画家に「描きやすいものは何か、また描きにくいものは何か？」と聞いたところ画家は「犬や馬は描きにくく、鬼や奇怪なものは描きやすい」と答えました。つまり、犬のような私達のすぐ身近にある存在は、正確に捉えることが難しい。しかし、派手で大げさな想像物である鬼は、誰にだって描けるものだという事です。

戦後からずっと今まで眠っていた——最近眠りから目覚めはじめているかもしれませんが——日本の官僚達は基本的なこと、身近なことを捉えられなかった。つまり、犬が描けず鬼に走ってしまったということです。

日本全国的に下水道の整備<sup>\*2</sup>は十分ではないけれども、数百億円するモニュメントは全国的に至る所にあります。また、先進国で電線の地中化を行っていないのは日本だけです。護岸工事等ははずめられています。電線の問題はつまり、「犬」です。身近で目に入らないのです。対して、大規模な工事や道路を作り何かを残すというのは見せられること、つまり、「鬼」なのです。

地方にあるモニュメント等をみていると、残念ながら日本のデザイナーの学校、建築の学校では、自然に溶け込む物を作らしようという教えになっておらず、奇抜なもの、人を驚かせ、自分がどれだけ大変だったかを主張することばかりを教わっているのでは？ と思ってしまう。

景観条例のある古都京都でも同様に、歴史的な趣のある建物の隣に、ハウスメーカーの色とりどりの住宅が建設される様は、「私は京都が嫌い」と主張しているかのようです。先程触れました電線の地中化や広告看板の規



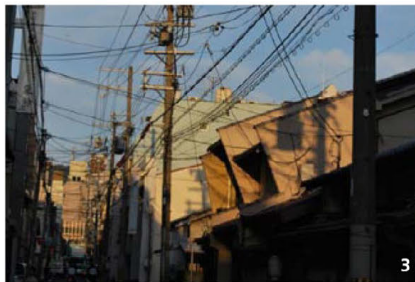
北海道のニセコ町のように、外資参入によって再建された例についてどう思うか、との質問にコメントをするアレックス・カー氏。今まで外資系組織が参入してこなかったために、日本は世界基準に発達しなかった。日本にトップクオリティのホテルがないのもその例で、ニセコは他のリゾート地のモデルとなっている、とコメントいただいた。

制等ですが、看板と電線ははずせば景色はより美しくなり、歴史や趣を漂わせる等多くのメリットが生まれるのです。

### 美しい日本の風景を 次代に手渡すために

日本にはまだまだ素晴らしい自然が残っています。それらを不必要な公共工事から守り保存し、観光資源とすることは可能なのです。観光には奇抜なものを作る必要はありません。「なんでもない魅力」というのがあるのです。だからこそ皆さんはヨーロッパの小さいながら美しい田舎町にいて感動したりします。世界遺産や文化財になるような神社仏閣は国のサポートで残されますが、小さな集落の土壁の納屋等はあっという間に壊されて、二度と戻ってこない存在です。私達の仕事はこうした「なんでもないもの」をいかにして守るかということに焦点を絞っています。

「掌中の珠」という言葉がありますが、日本の観光や景観の問題も、新たなモニュメント、ハコモノ、護岸工事等、皆がビックリするようなものを作らなくていいのです。自然や文化等、はじめから手の中に素晴らしいものがあるわけですから、それらをいかに大事にするかがこれからの課題だと思います。



1 田舎では過疎化が進み、街はシャッター街と化している。都市に住んでいるとわからないが、観光産業の発展の遅れゆえの影響。2 日本全国至る所で見られるコンクリートで覆われた山々。政治家や官僚・役人が国民から集めた金を湯水のように垂れ流して作ったもの。3 電線の地中化が進んでいない様子は、海外からの来訪者の目には決して先進国ではなく、途上国として映る。4 アレックス・カー氏の「麓庵(ちいおり)」がある祖谷の風景。日本にはまだまだ素晴らしい景観がある。それらの魅力に気付くこと、大事にしてゆくことが私達の課題である。

#### Alex Kerr アレックス・カー

(株) 庵 取締役会長、東洋文化研究者。1952年米国生まれ。1964年家族と共に初来日。エール大学、英国オックスフォード大学卒業後、1977年より京都府亀岡市に在住し、日本と東アジア文化に関する講演、執筆等に携わる。2004年(株)庵を設立し京町家の再生事業、景観コンサルタント、日本伝統文化体験研修事業を開始。著書に『美しき日本の残像』(1993年新潮社、新潮学芸賞受賞)、『犬と鬼』(2002年講談社)、『Bangkok Found』(River Book, 2009)等がある。

※ 1=UNITWO (June 2008) . "UNITWO World Tourism Barometer, Vol.5 No.2". Retrieved 2008-10-15.  
 ※ 2= 日本下水道普及率は72.7% (2009年現在) とかなりの水準には達成しているが、先進国としては低い値であるうえ地域格差が非常に大きく、未普及地域における早急な整備が求められている。



## 「持続可能なライフスタイル価値の創造 少量消費の最大幸福（第三の消費）」

熊野 英介 / アミタ株式会社 代表取締役



江戸の飢饉中の頃、華美禁止の中でも江戸の人は江戸百鬼を生み出しおしゃれをした。音で静寂を味わう鹿威し、清涼を感じる風鈴等も必要以上のマテリアル消費をせず、知識と感覚を用いて豊かさを生み出した好例。「森林ノ牛乳」も、「あの牛乳を飲みたい」と、記憶に訴えかける。知覚を使ったデザイン・イノベーション。



熊野 英介 Eisuke Kumano

1956年兵庫県生まれ。1979年スミエイト興産(株)(現アミタ(株))入社、1993年11月より同社代表取締役社長就任。\*持続可能社会の実現。を掲げ、他社に先駆け再資源化事業を開始。2005年、持続可能経済研究所を設立。2007年自然放牧「森林ノ牧場」を開業。総合環境ソリューション企業として事業領域を拡大している。現在は、グローバル・コンパクト・ボード・ジャパンのボードメンバー、東北大学非常勤講師を務め、公益財団法人信頼資本財団理事長、特定非営利活動法人地球デザインスクール理事長を兼任。著書に「思考するカンパニー」(幻冬舎)、『自然産業の世紀』(創森社・アミタ持続可能経済研究所共著)等がある。  
www.amita-net.co.jp

## 厳しい制約の時代へ突入

地球温暖化抑制が叫ばれる昨今ですが、私は、現在の人類の不必要なくらいの物欲を冷まさないと持続可能な社会はできないと思っています。なぜなら、これからあらゆる意味で厳しい制約条件の時代へ突入するからです。オイルピークが指摘され、原油残量は約1兆バレル\*とされていますが、その量は、富士山の8分の1程度、小さな日本の小さな琵琶湖6杯に満たない量です。たったそれだけが全人類に残された石油の量とされています。また、食料自給率の問題にしても、農業に必要なリン、カリ等の鉱石はわずかの国が独占しています。このような制約条件のもとで我々はどのような時代を過ごしていかなければならないのでしょうか？

私は事業家で、社会のニーズを形にするのが仕事です。どんな大きな会社も社会ニーズを掴んでいかなければ淘汰され、小さな会社でも社会ニーズを創れば発展すると信じています。では、社会のニーズとは何なのか、どのような未来が豊かだということなのでしょうか？

## 記憶、共感、無形性のデザインへ

人類史上初めて、先進国の多くの人々は衣食住が足りているにも関わらず、礼節を忘れ、不幸になっています。いじめ、アレルギー、メンタルの病、引きこもり、自殺、これが今の世の中です。現在の豊かさの正体です。ここを解決するのが我々の課題だと思います。

1973年、アメリカの社会学者ダニエル・ペルは「エネルギーの効率的配分によって経済効率と成長を第一義とする『経済的様式』から、知識や情報による社会的な問題解決という

『社会的様式』への関心の变化」が必要とされています。一方、経営学者で社会学者のピーター・ドラッカーは「人間の行動を利潤動機に説明することが問題であり、人間は経済と関係なく、愛情や倫理動機でも動く性質を持つ」と指摘しています。非常に重要なポイントだと思います。ここをどう形にするか、どうデザインするか。

サステナブルデザインは、エコデザインやユニバーサルデザインの融合と言われますが、どちらも有形です。むしろ満足とは有形なものだけでなく、『記憶』や『共感』といった無形性をデザインすることが必要なのではないのでしょうか。どのように共感と関係性をデザインできるか、どのように五感と知識を駆使し、『体感』をデザインするかではないのでしょうか。

## 記憶に訴えかける「森林ノ牛乳」

現代社会の抱える様々な課題解決に向けて、我々は顔やライフスタイルの見える事業の必要性を感じ、農・林・水・工の環境リスクの調査研究、コンサルティング等を通じて様々な実験を続けています。そこから生まれたのが森に放牧した乳牛から採れる500ml630円の「森林ノ牛乳」です。「豊かな時間」を提供する商品として成立するかを挑戦したものです。無形性をデザインすれば継続性のあるビジネスモデルが成立すること、そして、「少量消費で最大の幸福を」というコンセプトは持続可能な社会で実現可能であると私は確信を深めております。

## 持続可能な「第三の道」へ

サステナブルデザインとは自然資本と社会

関係資本、人間関係資本が向上するものでなければならぬと感じています。工業資本は時間が経過するほど劣化しますが、自然や人間関係は豊かな時間が経過すればするほど価値が増加します。このような、「資本が増加する」経済モデルにシフトしないと持続可能な社会を築くのは難しい。このままエネルギー、食料、資源が枯渇して弱肉強食で強い国がコントロールするようになり、生存競争に巻き込まれるのか。それとも国連等が中心となり環境全体主義になるのか。私はどちらもNOです。「第三の道」を創りたい。

自分らしく人生を全うすることは、物質量に関わらず最大の満足に繋がれると思うのです。それには記憶、共感等、無形性をどうデザインするかが深く関わっていると思います。

これからは物質的な豊かさを追求するより、豊かな時間、豊かな関係を人生の中にどれだけ蓄積できるか、それを活用して何を生み出せるかという価値競争の世界に入っていくのではないのでしょうか。それしか持続可能な第三の道はないのではないのでしょうか。

## 目の前の大事なことを見つめる

囲碁の言葉に『大局着眼、小局着手』というものがありますが、今まで工業社会は、バック・キャストやフォア・キャスト等、大きな戦略の話しかしていません。それも重要なことですが、目の前の大事なことも、しっかり見つめなければならぬと思うのです。今、私達には「小局着手」が必要なのではないのでしょうか。

\*1バレル (Barrel) = 約160リットル



## 第2部 実践・社会イノベーション 講演2

## 「リサイクルから第二資源という視点」

黒崎 輝男 / 流石創造集団 CEO



「多摩川のロビンソン・クルーソーと呼ばれる、河川敷に住んでいる人がいます。ハウスはないかもしれませんが、居場所はちゃんとあり、そこで皆それぞれの仕事をしながら、プライドを持って生きている。会社に所属していないので就職している形にはならないだけ」。人にはハウスよりも、ホーム＝居場所が必要と語る黒崎氏と書生の大矢知史さん。

黒崎 輝男 Teruo Kurosaki

1949年東京生まれ。早稲田大学理工学部応用物理学科卒業。アンティーク家具の輸入販売を経て「IDÉE」を創立。オリジナル家具の企画販売・国内外のデザイナーのプロデュースを中心に『生活の探求』をテーマに生活文化を広くビジネスとして展開。また「東京デザイナーズブロック」「Rプロジェクト」等デザインを取り巻く都市の状況を創ることに継続的に取り組んでいる。2005年流石創造集団株式会社を設立。同9月、廃校となった中学校校舎を再生した「世田谷ものづくり学校（IID）」内に新しい学びの場「スクーリング・パッド」を開校。2009年6月、自由に教え自由に学ぶ「自由大学」を開講。国際連合大学文化顧問。  
www.flowstone.jp

### ◆人間は死ぬ存在、 ということから考える

世界各国のサステナブルデザイン関連のシンポジウムに参加する度、いつもなんとなく物足りなさを感じています。地球が危機的状態といっても、地球が無くなるわけではなく、単に人類が死ぬだけじゃないか、と思うわけです。僕も含め、今日ここにいる全員にたった一つだけ共通しているのは「死ぬ」ことです。会社も同じで、かつて隆盛を極めた東インド会社がよい例で、永遠に続いている会社は一つもありません。どうせ没落する、皆も死ぬ、僕も死ぬ。だったら開きなおしてみようじゃないかと思うわけです。自分達の満足に行くサステナブルデザイン・ホイール（環）を作った、それで潰れたとしても潔くやめよう。そういう覚悟を決めればいいのかと思います。僕は「いつか人類が破滅する」という、逆の視点から、サステナブルを考えてみようと思っています。

### 都会にこそ資源がある時代

30年前は7割が地方に住み、3割が都市に住んでいたのが2007年には逆転し、世界の都市人口は農村人口より多くなりました。それにより、これまで消費する場であった都市には13億トンもの鉄が蓄積されていると言われ、衣類も今後10年間一切製造しなくても間に合うほどあると言われています。大都市の中に宝となる資源、そして冒険があるとなれば、今までのようにゴミ、リサイクルという感覚ではなく、「第二の資源」として新しい産業を起さそうじゃないかという発想が生まれます。例えば、「都市資源開発公社」とか

いう会社を作って、新しい産業として都市資源を開発していけばいいのです。その産業を作っていく革命が起きるのではと考えると僕達もやる気が出てくるわけです。

これまでのように、新しい鉄を用いて車を作ったり、工場で物を生産するだけでなく、古いものから新たな価値を持った美しいものやいいデザインを作ることが本当のクリエイティブではないかと考えると多くの可能性が出てきます。ファッションや家具等様々なデザイン界も巻き込めば、クリエイティブ性はどんどん湧いて来ると思います。

### 誰もが許され、受け容れられる 「鎮守の森」

今、都市には「鎮守の森」が必要なのではと僕は考えています。誰でも逃げ込める、守ってくれる場所、ハブみたいなもの。お母さんに怒られた子供や、捨て犬も逃げ込んだり、倒産した人もとりあえず身を寄せろ。誰も分け隔てなく、逃げていっても受け容れてくれるような場所です。

全てがお金で測られることによって、儲からないことは職業ではないとされ、美しい物、いいものを創ろうという人間の根本的な部分が崩れてきているような気がしています。

若い世代がクリエイティブなエネルギーを使って、新しい時代を作るにあたって、逃げ場を失って、彼らが押しつぶされないように、我々は流れをせき止めたりせず、「それでもいいんだ。」と受け入れることです。

### 産業界の現状維持構造にこそ革命が必要 ◆深く、生きる

今朝の新聞では、不況の影響で新卒就職率80%で最悪と言っていましたが、それは従来型の企業にしがみつこうとするからで、ちょっとしたアイデアがあればいくらでも仕事になる時代です。そう思うことがクリエイティブであり、デザインだと思います。

都会には、廃校もいっぱいあり、資源もある。そこで必要なのは『潔さ』。「どうせ死ぬんだし、ゴキゲンでやろうじゃないか」と思うこと。そう考えると、桜の花に例えられる日本的な潔い生き方が、今の時代に合っているのではないかと思います。



1 毎週土日、青山の国連大学前で開催されているFarmer's Market@UNU。生産者と消費者が直接触れ合う場を提供している。 [www.farmersmarkets.jp](http://www.farmersmarkets.jp)  
2 2009年6月に世田谷ものづくり学校内に開校した「自由大学」。自由に学び、自由に教え合いながら、自由に生きるための基礎力を養う開かれた学びの場。  
[www.freedom-univ.com](http://www.freedom-univ.com)

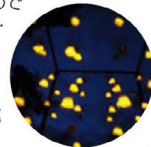
## 第2部 実践・社会イノベーション 講演3

## 「自分を生きる？」

西村 佳哲 / リビングワールド 代表



「実感は、欲求や生理現象、自然現象に近い感覚。いくら大好きなものでも、食べられる量は限られているように、限界が体感的にわかる。実感を大切にすることはおのずと、サステナブルに近づくのではないか。」と語る西村氏。リビング・ワールドの作品も自然現象をモチーフにしたものが中心。1 風の動きを受けて光る『風灯：Solar』、2 ガラスキューブの中に銀河系が浮かぶ作品、『太陽系のそと』。



1

## 西村 佳哲 Yoshiaki Nishimura

1964年東京生まれ。プランニング・ディレクター。武蔵野美術大学卒。つくる・書く・教える、三種類の仕事に携わる。コミュニケーション・デザインを主領域とする事務所・リビングワールド代表。多摩美術大学非常勤講師。働き方研究者としての著書に『自分の仕事をつくる』（晶文社／ちくま文庫）、『自分をいかして生きる』（バジリコ）、『自分の仕事を考える3日間 II』（弘文堂）等。 [www.livingworld.net](http://www.livingworld.net)

## いのち≧サステナブルということ

今日のタイトルですが、実はこの『?』マークがポイントです。皆さんはどういう風に生きていくのですか? という問いかけなんです。僕自身は、実際に自分自身が感じている実感を手放さないこと。そして、自分の信じていることや愛していることに、自分の力と時間を使っていきたいと思っています。

先ず、この会議に対する僕のスタンスを表明すれば、「いのち≧サステナブル」。つまり、当たり前のことなのですが、僕は持続可能性より、「いのちがある」ことの方が大事だと思っています。いのちとは、生命力があるということです。サステナブルということ、僕はエンジニアリング・マターではなく、生命感の問題として捉えたいのです。



2

## 大切なのは実感を手放さないこと

今日はデザインに夢を見ていきたいという方々が大量集まっていると思います。僕自身も大学でデザインを学び、企業で働き、そして今もデザインやものづくりに携わっています。けれどもその中で、デザインという言葉が使えなくなってきました。デザインより「仕事」という言葉の方が自分の思っていることを捉えられ、しっくりくるような気がしています。「仕事」の方が人のいのち、つまり働きやエネルギーが、より投入されている感じがするので。

僕は大学で学生達に「自分が実際に感じていることを感じることを大切にしよう」と言っています。自分が日々、今この瞬間の実感を手放さず、手がかりにしていくのなら、何をし

たっていいと思う。もちろんデザイナーにならなくてもいいと思うし、そう言いながら、授業をしています。結局は誰もが「なるものになる」。であるなら、下手な考えをこね回すより、自分の中にある実感に敏感でいることの方が大事だと思うんです。

情報化が進んだ結果、他人の課題やミッションをまるで自分のもののように感じ、自分が留守になってしまっているような人が、多々いるのではないのでしょうか。頭でかちになってバランスを失わずに、人としての全体感を取り戻すことが重要だと思っています。僕は、人をそういう状態にするモノゴトが「いい仕事」なんじゃないかと思っています。

## デザインの力をどう使うか

かつて商業美術という言葉がありました。そこには夢があったと思います。今、デザインという言葉についてはどうでしょうか? 今後、社会の長期的な低成長化によってデザイナーの数も自然淘汰されるとともに、これまでと違った能力を求められるでしょう。

デザインはそもそも生活福利のための仕事でした。でも経済福利のための仕事のようになり、モチベーションを損なった。仕事の意味を取り戻すべく「環境」というキーワードが登場して、今は「BOP<sup>\*</sup>」のような領域も注目されています。

デザイナーは自分の取り柄を少しでもいい形でいかしたい、という願いを持っていると思う。しかし、例えば企業が環境問題をただビジネスチャンスとして捉えていた場合、「よいことをしよう」という純粋な思いだけで入ってゆくと、何か別のことに自分の力を利用されたような、妙な無力感を味わうことがあるん

じゃないか。そういうことがくり返されている気がして、もうやめたいと思うのです。

僕はネスレ社のロゴマークのデザインが大好きなんです。けれどもこの会社がしていることは、どうもただけない。でもこんなに素敵なデザインがついている。これはどういうことなんだろうと思うのです。

よかれと思ってするデザイン活動が、とすると人の心を裏切るようなことやそれを助長することに繋がったりする。または、実感を切り離さないと、働けなくなる。デザイナーは、いったい自分の力を何のために使うか。力は只の力であって、それをどう使うかが重要です。職能とは、生活を保障してくれるものではなく、誰がどうやってそれを通じて人々とどんな関係を結べたかということで価値が決まってくるのではないのでしょうか。

## サステナブルとは目的ではなく結果である

欲望には際限がないけど、欲求には生理的な限界があります。欲望は思考です。そして欲求は、お話ししてきた実感に繋がっている。一人ひとりのデザイナーが実感を大切にして、生きて・働いてゆくことが、おのずと社会に持続可能性を与えてゆくんじゃないかと僕は思います。

西村氏の協力で会場にディスプレイされたアース・クロック。会議開催地である東京を中心として、刻々と移り変わる太陽の昼と夜の様子がリアルタイムに映し出された。



\* BOP=Base of the Pyramidの略。開発途上地域にいる低所得者層を意味する。近年、ビジネスの世界でこの貧困層を巨大な消費市場として捉え、そこでビジネスを展開することにより、社会的課題の解決も図ろうとする動きが加速している。

## 第3部 総括

## 「基調講演会を振り返って」

益田 文和 / サステナブルデザイン国際会議実行委員長

## 変化の起点を確認する

本日は「社会イノベーション進行形」をテーマに、中身の濃いお話をいくつも頂きました。本会議はサステナブルな社会づくりを目指したものでありますが、社会を変革してゆこうと考えるには、元々の自分達の「立ち位置」がよくわかっていないと、変わりようがありません。自分達が変わるにしても何を変えるのかわからないからです。

今回、アレックス・カーさんにご登壇頂いた理由は、それをはっきりさせたいと思ったからです。我々は平和だし、綺麗だし、日本はなんとなくいい国と思っていますが、本当にそうなのかどうか。いったい我々は何に向かってゆくのかわからないのを知りたかったのです。

自分が「茹で蛙」であることに  
気付くこと

アレックスさんのご著書『犬と鬼』中に、「茹で蛙」という比喻が出て参ります。熱いお湯に蛙を入れると驚いて跳ね逃げ、命は助かります。ところが、水に入れ徐々に温めてゆくと、気がつかずに蛙は茹だって死んでしまう。

今日、私達はアレックスさんから沢山の写真を見せて頂きました。どれも知らないはずのないことばかりなのですが、我々が気がつかなかった日本の現実の姿がそこにありました。我々は知らず識らず「茹で蛙」になってしまっており、高度成長期以来、じわじわと日本の国土が変わってしまったことに、気がつかなかったのです。

アレックスさんのご意見を聴くことは辛くても、それにきちんと耳を傾けることが必要だと感じます。最後にまだ希望があると言っていただけたことを励みにし、解決に向けて努力してゆきたいと思えます。

## 営利と社会福利を両立するビジネス

熊野さんからは、急成長しているアマタ株

## 益田 文和 Fumikazu Masuda

1949年東京生まれ。東京造形大卒業後、国土建設、デザインオフィスを経て1978年よりフリー。その後frogdesign デザインディレクターを務め、1991年株式会社オープンハウス設立。製品デザイン開発や地域産業のデザイン振興、また、エコデザインやサステナブルデザインに関する国内外のプロジェクトに関わる。東京造形大学デザイン学科教授。有限責任事業組合エコデザイン研究所代表。o2 Japan リエゾン。財団法人日本産業デザイン振興会理事。一般社団法人日本デザインコンサルタント協会理事。各媒体への執筆等多数。  
www.openhouse.co.jp www.ecodesigninstitute.com

式会社さんの、社会イノベーションの事業に関する色々なご成功事例のお話を頂きました。企業の在り方とサステナビリティを軸に、どう新しいビジネスが展開できるかについて、非常に具体的に説得力のある話がお聞きできました。デザイナーの苦手なビジネス分野のお話ではありますが、大変明確で、沢山のヒントも頂きました。一つでも二つでもそれを捕まえられれば、活かしてゆけるように思います。また、熊野さんのようなビジネスの方が「記憶」「共感」のデザインということをおっしゃられていて、私達も負けじと踏み出してゆかねばという気がしました。

社会の健全な発達  
若者達が信じられる社会を

黒崎さんからは第二の資源とデザインのお話を頂きましたが、それ以上に私の心に残っているのは、逃げ場を作るというお話です。それが、これからの社会の健全な発達に影響するということも指摘して下さいました。

これは大変重要なことと思えます。今日、会場後方に桑沢デザイン研究所の学生達の作品が展示されています。「2023年のサステナブルな社会」をテーマにしている中で、「自殺」を取り上げている学生もいます。毎年若者の自殺数はスウェーデンと日本で1位と2位を争っているといひます。我々にしてみれば社会福祉が充実しているスウェーデンでそんなはずはないと思えますが、向こうからしてみても日本がそんなはずはないと思うでしょう。こんなに若い人達の自殺が多いというのはどうか。このことを考えると、黒崎さんが今日おっしゃられた逃げ場というお話がどれだ

け重要かという気がしています。

「無理のない」暮らし、  
「Easy」な暮らしを目指す

西村さんからは、ご講演の中で2回に渡り隣の人と話す機会を与えて頂きました。私は幸運にもサステナビリティとは何なんだろう、という深い部分のことをアレックスさんとお話をする機会を得たのですが、サステナブルという言葉は好きじゃないということで意見が一致しました。アレックスさんは特に「持続可能」という日本語は嫌いとのことでした。何であれ、「持続」は可能なのです。では、何が望ましい状態であるのか?と議論した結果、「無理がない」ということじゃないかという話になりました。

無理してデザインをする、無理してものを作る、無理してそれを消費して経済を成立させていく、ということがサステナブルではないということです。

無理がないということは、流れにそって自然に行われることで、要するにストレスがないってことだから、言ってみれば、英語では「Easy」ということかもしれない、という話をいたしました。

「サステナブル」という言葉の捉える事物の範囲、また、我々がこの会議を通して目指すところのものを考えると、この会議の名前をこのまま進めるのがよいのかも考える必要がある気がしています。いずれにしても、このような場をもち、意見を交わすことを継続的にすすめていきたいと思っています。

皆さん、本日は、本当にありがとうございました。



3月13日…交流会

# 「サステナブルデザイン国際会議

# × PechaKuchaNight™

PechaKucha - devised by shared by Kline Dytham architecture



13日基調講演会終了後は交流会として「サステナブルデザイン国際会議×PechaKuchaNight」を開催。20秒×20枚のスライドを用いた10組のプレゼンテーションが行われた。

1 桑沢デザイン研究所のプロダクトデザイン分野専任教員の田中圭吾氏が交流会の司会進行を勤めた。

2 同じく司会進行の柳澤大樹氏は、プレゼンターとしても参加。日本発のとんがったネタを海外に英語で発信する自身のメディア「EDGY JAPAN」について紹介。  
[www.edgyjapan.jp](http://www.edgyjapan.jp)

3 『Suitendo (萃点堂)』主宰の津田和俊氏。「持続可能な暮らしの具体像を描くために、多様な視点を共有する場」をコンセプトに、専門分野の枠を超えた知識や知恵の共有や、実践に向けた取り組みを行っている。  
[www.suitendo.net](http://www.suitendo.net)

4 代表の竹中壮一氏(左)とデザイナー五十嵐広威氏(右)によるデザインユニット『501DESIGNSTUDIO』。在庫として眠っている工業製品を素材に、手仕事を加えて提案する商品は、本来生活に身近であった工芸を現代的な感覚で呼び戻している。  
[www.501designstudio.com](http://www.501designstudio.com)

5 『エコランド』の活動を紹介する株式会社ウインローダー代表取締役社長の高嶋民仁氏。不用品をリユース、リサイクルそして、\*リアライズ、という切り口でリデザインし、新たに商品として生き返らせるプロジェクトを行っている。  
[www.re-arise.net](http://www.re-arise.net)

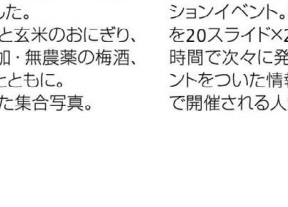
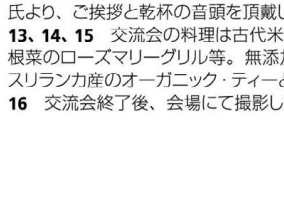
6 ミレニアムシティ理事長の小野加瑞輝氏からは昨年開催の『未来ビレッジサミット』の報告と「ゆるやかなコミュニティをつくる多様な参加・建設システム」というプレゼンテーションを頂いた。  
[www.npo-mc.com](http://www.npo-mc.com)

7 本会議前後夜祭として開催された「Designers Accord Tokyo Town Hall」について、[greenz.jp](http://greenz.jp) インターンの山根寛盟さんから報告頂いた。オープンソースの動きが活発化していることは見逃せない。  
[www.greenz.jp](http://www.greenz.jp)

8 社会のためにデザインを活かそうと社外活動するグループ In-House Outの寺澤氏と視覚障がい者も参加できるフリークライミングスクールを主催するNPO Monkey Magicの小林氏からは『ボランティアデザイン』というテーマで両者のコラボレーション・プロジェクトの紹介をいただいた。  
[www.monkeymagic.or.jp](http://www.monkeymagic.or.jp)

9 島津洋平氏からは『エコデザインマテリアル』を中心に、サステナブルな社会にふさわしいものづくりの研究、実践、情報提供活動等を行っている有限責任事業組合サステナブルプロジェクトについて紹介頂いた。  
[www.sustainable-project.com](http://www.sustainable-project.com)

10 第2回会議の講演者シンギー・カルトノ氏のその後の活動を、代理人鈴木美絵氏がプレゼンテーション。



地元木材を用いた製品づくり「magno」の他、現進行中のアグロフォレストリー・プロジェクトを紹介。  
[www.magno-design.com](http://www.magno-design.com) [www.ecomiyage.com](http://www.ecomiyage.com)

11 スマール・サイクルをコンセプトに、カフェの廃油を再利用して作られているキャンドル「Waste Oil Candles」について『Filt』代表の藤原啓氏がプレゼンテーション。等身大のものづくりやデザイン活動を積極的にやっている。  
[www.filt-made.com](http://www.filt-made.com)

12 交流会の開会にあたって、PAOS代表の中西元男氏より、ご挨拶と乾杯の首頭を頂戴した。

13、14、15 交流会の料理は古代米と玄米のおにぎり、根菜のローズマリーグリル等。無添加・無農薬の梅酒、スリランカ産のオーガニック・ティーとともに。

16 交流会終了後、会場にて撮影した集合写真。

## Pecha Kucha Night ペチャクチャナイト

Klein Dytham architecture(クライン・ダイサム・アーキテクト)が2003年にスタートした公開型のプレゼンテーションイベント。話が長くなりがちなプレゼンテーションを20スライド×20秒、合計6分40秒という限られた短い時間で次々に発表してゆくというスタイルを確立。ポイントをついた情報と交流の場として今や世界280の都市で開催される人気企画。  
[www.pecha-kucha.org](http://www.pecha-kucha.org)

3月12日…前夜祭

## 「Designers Accord Tokyo Town Hall」 greenz.jp、サステナブルデザイン国際会議実行委員会



photographed by The International Conference of Design for Sustainability

イベントは、兼松佳宏氏（クリエイティブディレクター、勉強家 / greenz.jp）の「Designers Accord について」からはじまり、津田和俊氏（本会議実行委員、大阪大学大学院工学研究科特任研究員、Suitendo 主宰 / www.suitendo.net）の「サステナブルデザインの系譜」、NOSIGNER 氏（デザイナー / www.nosigner.com）の「OPEN SOURCE PRODUCT」、田中浩也氏（デザインエンジニア、慶応義塾大学環境情報学部准教授 / http://mountain.sfc.keio.ac.jp/~tanakalab/）の「オープン・(リ) ソース・ファニチャー」のライトニングトークののち、前衛のメンバーに林千晶氏（株式会社ソフトワーク創業者・取締役、クリエイティブ・コモンズ アジア・プロジェクト・コーディネーター / www.creativecommons.jp）を加えてのトークセッションが行われた。

本会議前夜祭として、3月12日（金）「デザイン×サステナビリティ×オープンソース = ???」をテーマとしたトークイベントを東京ミッドタウン・デザインハブ インターナショナル・デザインリエゾンセンターにて開催した。「デザインの京都議定書」とも呼ばれる『Designers Accord』のアジアでの公式イベント開催は初。

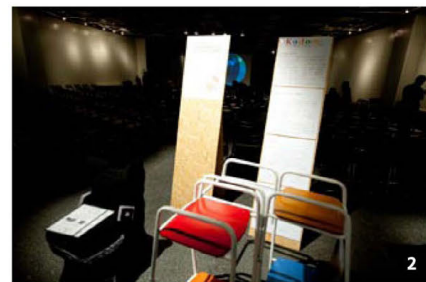
当日は本会議実行委員の津田和俊氏より「サステナブルデザインの系譜」についてのプレゼンテーションを行った。イベント速報は翌日の交流会にて、greenz.jp インターンの山根寛盟氏より発表された。

### Designers Accord デザイナーズアコード

デザイナー、教育者、ビジネスリーダーが参加するサステナブルデザインの協定。「デザインの京都議定書」とも呼ばれる。グローバルなネットワークを構築し、各都市で開催される「タウンホールミーティング」等のイベントや、ウェブサイトでケーススタディを共有することで、サステナブルデザインの取り組みに対する支援を行っている。現在は世界 100 国から 600 のデザイン会社、30 の教育機関、30 の企業が Adopter として参加中。 [www.designersaccord.org](http://www.designersaccord.org)

3月9日～13日…展示会

## 「2023 年のサステナブルデザイン展」 / 「エコデザインマテリアル展」 専門学校桑沢デザイン研究所 学生有志、東京造形大学 学生有志、有限責任事業組合サステナブルプロジェクト



本年度の会議のターゲットイヤーは 2023 年。現在学生である若者達は、その頃には、社会の担い手として、30 代前半の青年期を迎えているだろう。しかし 20 歳になったばかりの若者にとって、これから出てゆこうとする社会の有り様は漠然として捉えきれないばかりか、それがどのように変化するかを予測することは、想像力の及ぶところではない。先

ずは自由に「このような世の中であってほしい」という社会の姿を描くことにより、望ましい社会変化の方向を築いてゆけるのではないだろうか。展示会では、『2023 年のサステナブルな社会』をテーマに専門学校桑沢デザイン研究所と東京造形大学の学生達がそれぞれの未来に向けた提案を展示した。同時開催として『エコデザインマテリアル展』も併催。

1 桑沢デザイン研究所プロダクトデザイン 2 年「サステナブル社会」受講生有志による『2023 年のサステナブルな日本の社会のデザイン』の展示。今日の社会が抱える課題を 2023 年に向けてどのように解決するかを示した。2 東京造形大学デザイン学科学生は「2023 年に 6 歳の学童年齢になる子ども達に贈る椅子」として、使い終わった学童椅子を再利用し、自分の未来の子供のために椅子をデザイン。3 有限責任事業組合サステナブルプロジェクトによる『エコデザインマテリアル展』では環境性能を追求し新たな表現と価値感を持ったエコデザインマテリアルを展示した。

## セッション1

## 「地方・農業 × デザイン」

プレゼンター 中原 知里 / 田舎会社東京支店 × ファシリテーター 津田 和俊



津田 和俊 Kazutoshi Tsuda

1981年岡山県新庄村生まれ。大阪大学サステナビリティ・デザイン・オンサイト研究センター特任研究員。環境省環境研究総合推進費「都市・農村の地域連携を基礎とした低炭素社会のエコデザイン」（平成20～22年度）担当。千葉大学大学院自然科学研究科多様性科学専攻修了（工学博士）後、2008年11月から現職。資源循環およびサステナブルデザインを研究領域とする。Suitendo 主宰。 [www.tsudakazutoshi.com](http://www.tsudakazutoshi.com)

## プレゼンテーション

## 「農から始まるコミュニティレード」

皆さん、フェアトレードという言葉はご存知でしょうか？ フェアトレードは世界的な繋がりを視野に入れた公正貿易ですが、私はもっと身近な問題にも目を向けなければと思い、国内における「コミュニティレード」に注目しています。コミュニティレードとは、生産者のコミュニティと消費者のコミュニティの相互理解があって成り立つ流通の在り方です。規模を小さく捉え、自分達の生活の中にある「差」を、埋める事を課題とし、社会に問題提起しているとも言えます。

現在の農業において、商品となる野菜には、一定の既定があり、当てはまらないものは捨てられてしまっています。私達はその規格外の野菜を「もったいない野菜」と名づけ、地方農家から送ってもらい、都内で販売しています。最初はなかなか理解してもらえませんでした。けれども、この規格外の野菜をわざわざ購入する理由とその必要性をきちんと伝え、地方の生産者達の想いを伝えることで、徐々に意識の「差」が埋められていき、購入者が増えています。

ものを売るということは当然商売としてなりたたねばなりません。最初は野菜の販売だけでしたが、徐々に加工品の販売やカフェの経営、イベントを企画したり、また、現在では同

じょうな悩みを持つ地方の方との取引をしたり、事業の中は広がっています。

私達、東京支店のメンバーは、これらの活動を通じ、自分の得意分野を活かした役割に気づき、自分の存在価値や居場所を確立しています。人にはそれぞれ「役割」があると思います。都会の役割は、新しい技術や販売のノウハウを提供する等して、田舎を引っ張っていくことだと思うのです。また、都会は情報が集まる所です。メディアを利用して農業に興味を持ってもらうためのプロモーション等も都会の役割だと思います。

今後、田舎・都会といった区別はなくなってゆくのではと思っています。それは、全てが平均的になってしまうということではなく、都会と田舎がもっと流動的に行き来できるようになり、各地の差が特色として認められるようになることだと思っています。

## 中原 知里 Chisato Nakahara

田舎会社東京支店事務局長。慶應義塾大学法学部政治学科4年在学中（当時）。貧困や格差というテーマに興味を持ち、身近な場所にもその問題はあるのではないかと、島根県・旅館吉田屋（週の半分は旅館経営をし、残り半分は農業を通して田舎の問題解決を行っている）のインターンに参加。東京に戻った後も、引き続き田舎と都会を繋げようと数名の学生で田舎会社東京支店の活動をスタートさせる。 [www.lets.gr.jp/egao/](http://www.lets.gr.jp/egao/)

## ディスカッション

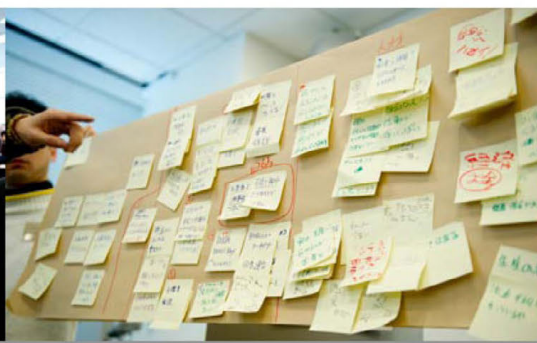
## 生産と消費を繋げるデザイン

ディスカッションの後の各班のプレゼンテーションでは、生産者と消費者を「繋ぐ者」の役割がキーワードになった。これをデザインが担っていくことがサステナブルな社会へと繋がっていくのではとの意見が多く挙げられた。

具体的には、田舎と都会の文化的な特徴を踏まえた上で、田舎の文化や伝統を繋げていく交流をすること、田舎から野菜の食べ方を学ぶこと等が提案された。また、田舎と都会が連携して日本の農に対する理念のディレクションに取り組むことや、メディアを利用して農業に興味を持ってもらうためのプロモーションを行うこと等も挙げられた。



田舎会社東京支店事務局長がある恵比寿のアサナテサーナカフェの前では、毎週金・土にもったいない野菜を販売している。一つひとつの野菜には作っているおばあちゃんのお顔絵が。 [www.p-alt.co.jp/asante/archives/cafe/](http://www.p-alt.co.jp/asante/archives/cafe/)



## セッション2

## 「共有 × デザイン」

プレゼンター 桐山 雄一／エニグモ × ファシリテーター 本田 圭吾

## プレゼンテーション

## 「シェアリングという新しい消費スタイル」

「ShareMo」は物を通じたコミュニケーション・サイトです。利用に当たっては、会員登録をし、持っているけど使っていない物の写真をサイトに出品し、借りたい人に貸出します。または誰かが出品している物を借りることができます。基本ルールとして、シェアは無料で送料は借りの方が負担するシステムです。

現在までの出品数は累計17万点。会員数は4万人を超えました。地域間の偏りはほぼなく、インターネット利用人口の分布に比例していると思います。一番の転機だったと思うのは2008年の10月頃です。この前月にリーマン・ショックが起これ、世の中的に節約の気運も高まり非常に会員が増えました。

ユーザーは、20～30代の女性が6割を占め、その内訳は主婦とOLでおよそ半々です。主婦の方はベビー用品のシェアが主流になっており、OLの方は美顔器やエクササイズDVD等、美容関係の物が人気です。また、人の物を借りているということで、物を大切にすることを意識している方が非常に多いように思います。ユーザーへのアンケートでは、94%の方が友人に紹介したいと思って使って下さり、ネットサービスとしては珍しい程ロイヤリティが高いサービスです。

シェアモを運営してゆく中で、ユーザーか

らの新しいシェアモの活用方法が表れてきたのでいくつか紹介します。

一つ目は『服袋』。着なくなった服を数着まとめて袋に入れ、出品します。借りた人は、気に入った服を取り出し、その代わりに同数の自分の着なくなった服を袋に入れ次に回します。中の服を入れ替えながら交換していくという仕組みです。子供服、メンズ、ブランド、冬物等があります。二つ目はペット好きの方が『ペットのコミュニティ』を作ってシェアをしています。例えば、犬用バリカンと爪切りは13人でシェアしながら、トリミング情報等の交換をしています。また、『リレー小説』というものもあります。借りないと読めない、借りた方は小説を書くというルールです。

今までは「買う」「所有する」という時代でしたが、私達はこれから、第三の消費として『シェアすること』がさらに重要になる時代だと考えています。今現在行われているシェアリングは、例えばカーシェアリング等は、基本的にB to C=企業対ユーザーです。しかし、シェアモはC to C=個人対個人の繋がりが軸の新しいシェアスタイルです。シェアですむものはシェアで、そして本当に欲しい物だけを買う生活。その結果、物を大切に暮らす方、循環型の暮らし方ができればと思っています。

## ディスカッション

## シェアを円滑にするデザイン

ディスカッションを通して出てきたアイデアをいくつか紹介する。

**シェアを前提にしたものづくりとシステム:**シェアを前提として物、システムをデザインすることで、よりシェアしやすく、シェアが促進されるのでは。ユーザーの意見が作り手にフィードバックされる仕組みづくりも、よりよいものづくりに必要。売れるデザインではなく、使われるデザインが評価されるようになるのではないかと。また、出品物をリメイクする集団としてデザイナーが関わるのも面白いのでは。

**コミュニティを限定したシェア:**物の運送に伴うCO<sub>2</sub>発生は問題。シェア対象を全国ではなく、小さい単位に区切りコミュニティごとでシェアしては。ターミナル(例:コンビニ、ガレージ)を作ってシェアをすれば、送料も浮かせられ、インターネットがない人も参加しやすい。

**能力のシェア:**ガーデニング、ベビーシッター等の能力をサービスとしてシェアしては。

**外国人向け英語シェアサイト:**英語のサービスがあれば、携帯電話や生活用品セット等、海外からの滞在者の需要があるのでは。

**シェアメリットの可視化:**シェアによる環境貢献具合(素材節約やCO<sub>2</sub>発生の抑制など)を可視化。実感できることが励みになる。



シェアモではユーザーが安心して利用できるような工夫が色々なされている。例えば、利用することで溜まるポイントはユーザーの信頼度の指標になる他、出品物の引き取りができたり、あるいは植林や珊瑚の保護等にも利用できる。 [www.shmo.jp](http://www.shmo.jp)

## 桐山 雄一 Yuichi Kiriya

株式会社エニグモ経営管理本部広報担当。1984年生まれ。2007年慶應義塾大学環境情報学部卒業後、PR会社、フランス系広告代理店でイベント事業を経て現職。BuyMa、シェアモ、プレスブログ、filmo等エニグモのサービスのPRを行う他、各サービスのブランディング・CGMを用いたクロスメディアマーケティング・広告等の戦略立案、企画を行う。 [www.enigmo.co.jp](http://www.enigmo.co.jp)



## 本田 圭吾 Keigo Honda

専門学校桑沢デザイン研究所プロダクトデザイン分野専任教員。HONDA KEIGO DESIGN 代表。1974年生まれ。東京造形大学卒業後、アウトドア用品メーカー商品企画開発部門を経て現職。日用品、レジャー用品等の企画・デザイン、中小企業とのパートナーシップを中心に、地域技術を生かした製品の企画開発を得意とする。サステナブルデザイン、エコロジーデザインの手法をプロダクトデザインに実践するための活動を続け、ワークショップ等での指導を行う。日本インダストリアルデザイナー協会正会員。



## セッション3

## 「連携×デザイン」

プレゼンター 西村 琢/ソウエクスペリエンス、  
本村 拓人/グランマ × ファシリテーター 酒井 良治

## プレゼンテーション1

## 「体験の一步目を提供するギフト」

「体験ギフト」の企画・販売をしています。結婚式の引出物カタログをご存知だと思いますが、そこにはお皿だったり時計だったり掲載されていると思います。しかし、僕らの提供するのとは異なり、乗馬、ゴルフレッスン等の様々な体験が入っている「体験ギフト」です。カタログに同封されているチケットを使えば送られた人はお金を払わずそれらを体験できる。2005年から事業を始めました。「体験ギフト」はイギリスでは10～15年くらい歴史のあるビジネスです。

「Good Experience, Good Life (いい経験がいい人生)」ということを僕個人的にも、会社としても意識してやっています。\*ある人が新しく何かを始める、という仕組みづくりをしたいのです。人はなかなか新しい一歩を踏み出さない。けれども、いい経験がいい人生に繋がるとすると、そのギャップを埋められればと思うんです。ただ「やろう」と声をかけるのではなく、仕組みとして提供する。チケットを買った人のほとんどが、何かしらの新しい一歩を経験する。人に強制的に何かを体験させる手段といえるわけです。

いい経験を積み重ねていけば、結果的にそれはいい人生だった、と死ぬ時に思えると思う。楽しいこと、いいと思うことを追い求めていけばいいのではと思って活動しています。



西村 琢 Taku Nishimura

ソウエクスペリエンス株式会社代表取締役社長。1981年東京生まれ。慶應義塾大学経済学部在籍中、松下電器(当時)事業プランコンテストで優勝し3000万円の出資を受ける権利を得るのちにプロジェクトは中止に。2005年、体験型ギフト販売会社、ソウエクスペリエンス株式会社設立。世田谷ものづくり学校「自由大学」で「未来の仕事」講師を務める。  
[www.sowxp.co.jp](http://www.sowxp.co.jp)

## プレゼンテーション2

## 「世界を変えるデザイン」

BOPの分野を僕らがデザインという切り口で捉えている本質的な意図は、デザイナーが持つ特殊な洞察力、またデザインが社会的な課題を人々に伝えるメディアになると考えているからです。例えば、現場で観察したことやニーズを、我々は言葉でしか表現できない。けれどもデザイナーは、言葉に頼らないプレゼンテーションで相手のニーズを伝えることができたり、さらには、潜在的なウオントやニーズ(生活に足りていない物)を形にして人に伝えられる。私はデザイナーである皆さんに、そういった翻訳者としての機能をこの領域で発揮することを期待しています。

生活状況が非常に過酷な現地に踏み出すことは、大変な決意が必要です。しかし、そのように現地に入って正確にニーズを捉えないと、後々に完成する製品との本質的なニーズとミスマッチが発生します。自身が現場で生活をし、現場の生活に限りなく近づき、家族の一員となるような気持ちで自身を土着化させていながら、生活者のニーズをしっかりと掴んでいくことが何より大事だと思います。

今後、我々は途上国の大学、NGO等の拠点とより強いネットワークを築いてゆきます。そして日本のデザイナーの皆さんに現場の課題を共有させていただき、世界を変えるデザインを現地に提供してゆきたいと思っています。



本村 拓人 Takuto Motomura

株式会社 Granma 代表取締役社長。1984年生まれ。NY留学中、バングラデシュからアフリカ大陸まで陸路で歩みきる。その放浪の中、資本主義の残した正と負の軌跡を直視した経験から、BOP層の潜在的ニーズを満たす適正価格な製品の流通・開発に関する事業を開始する。2009年より現職。CSRに関連する企業ブランディングやプロモーションに資するWEBサイトの作成や動画制作等も行う。  
[www.granma-port.jp](http://www.granma-port.jp)



酒井 良治 Yoshiharu Sakai

財団法人日本産業デザイン振興会所属。1973年広島県生まれ。東京造形大学卒業後、1997年に財団法人日本産業デザイン振興会に入職し、制度民営化後のグッドデザイン賞の事業運営を担当。現在は東京都等行政のデザイン関係プログラムの構築・実施やアジア諸国との協働、東京ミッドタウンデザインハブでの展覧会企画等を担当。  
[www.designhub.jp](http://www.designhub.jp)

## ディスカッション1

## 体験したいこと

「結婚生活」「葬式」「介護される」等のいつか訪れる日常の体験、また、職業交換等の普段できない非日常経験等の意見が多く挙がった。「体験」とは、自分が身をもって経験しないと体験にはならない。それには時間と体力が必要で自分の体力以上のことはできない。自分自身で限界とされることも興味深い。

## ディスカッション2

## 世界へ繋げてゆく

## 日本のサステナブルデザインとは

短い時間の中で、意見を集約してゆくのは大変であった。世界で起こっている物事を我々は両極的ではなく、中間も把握することが必要。そこを追ってゆくこともサステナブルデザインに繋がるだろうとの意見も挙がった。気負いせず、多角的に挑戦していくことが大切である。



「モノ」ではなく「体験」を贈るギフトサービス「ソウ・エクスペリエンスギフト」。カタログから気に入ったギフトを選び、ウェブサイトから体験の予約をする仕組み。自分が体験したいギフトを贈って、2人で体験するというユーザーも多いそう。



これまでデザインは世界の10%の人を対象にしているにすぎなかった。2010年5～6月に開催した「世界を変えるデザイン展」では、発展途上国の人々が直面する課題を解決する約50点のプロダクトを紹介。デザイン関係者のみならず、中広い層の人々の関心を集め、会場のデザインハブは過去最高の来場者数を記録。  
<http://exhibition.bop-design.com/>



## クロージング・セッション

## 「Destination 2009-2023 を終えて」

## 日々の実践

本日のディスカッションを通して色々な可能性が見えました。実現は容易ではないと思いますが、時間や空間等の目に見えない物事も、うまく仕組みを作りあげ、デザインすれば、シェアの対象としてありえるかもしれません。今は難しくても今後いい社会を作っていく上で何かをやりたいと思いますし、日々実践してゆきたいと思います。(桐山 雄一)

## イノベーションが起こっている現場に身を置き、参加する

私が BOP 層と向き合う仕事に心が向かっているのは、今イノベーションの中心がそこに存在しているからです。BOP という生活領域では先進国で生活する概念を捨て、1ドルでも安いものづくりに挑戦しなければならない。紹介したライフストーリー\*と同様な製品は、日本でも災害用として売られていますが、価格は10倍程違います。BOPの現場のニーズを埋めるプロダクトやサービスは、いずれ先進国でも役立つ物になり、「リバース・イノベーション」が起こる可能性もありえると思います。課題があると感じることに素直に向かい続けることが、サステナブルな暮らし方に通じるのではないかと思います。(本村 拓人)

## 非日常経験を通し、日常の価値に気付く

皆さんの話を聞いていて、サステナブルデザインとは「態度」や「姿勢」みたいなことなのではないかと思いました。今日の皆さんからのアイデアの中で、特に「嫌な体験をする」というのは大変意味があると思いました。そういった体験を通じて日常の価値に気付く、日常を楽しくしてゆくこと、あるいはそういった体験をもプラスに捉えられるように成長すること。このような場を通じて、沢山の人がサステナブルを考える態度になっていったら、革命という大げさですが、何かが変わるきっかけになるのではないかと思います。(西村 琢)

## 本当に人間的な生き方は何か、を見つめ直す必要性

ディスカッションを通して思ったのは、僕らは両極の「極」しか見ていないのでは? ということ。例えば、都市と田舎。その間を僕は注意して見ていない。そこを捉えてゆく必要があると思います。

また、ネパールの出産支援キットの話がありました。僕は子供は病院で生まれるの

が当然と思っていますが、このキットを通して本当に人間的な生まれ方とはどういうことなのかと考えさせられました。

我々や年配の世代の皆さんは経験を過ぎ過ぎて、例えば地震があってもすぐ止むだろうと考えてしまうように「正常性バイアス」が掛かっている。いい意味で経験をしていない若い世代が身軽に挑戦し、飛び出してゆくことを応援したい。(本田 圭吾)

## 考え、意見を交わす場の重要性

デザインハブでは従来のデザインを超えて、新しい領域のデザインとの関わり、デザインに関心のある様々な立場の方との繋がり場を創ろうとしています。そこで考えるのは、こういう場がある重要性です。考え続けること、しゃべり続けること、動き続けること。そして、このような場があつての自分と皆さんとの関係があります。もちろん、こういった場に参加していない場合でも、日々様々なことを敏感に捉えてゆきたいと思ひますし、そのようにしています。けれども、やはり人と出会う話すと、議論を交わす場の重要性をことを反芻した三日間でした。(酒井 良治)

## 自分達が実践し、次の世代にその背中を見せていく

今日は「らしさ」という話が多く出てきましたが、それは考えても仕方ないのでは、という気もしています。ある歌に「僕らしくなくても僕は僕なんだ、君らしくなくても君は君なんだ」という詞があります。結局は個々の生き様や身のこなしであつて、「らしさ」にあま

り捉われず、どんどん変化していい。今日生まれた色々なアイデアも、ここで終わりにせず、言ったからには自分達自ら率先して実行してみる。全ては無理ですが、有限の範囲で有言実行していくことが大事なんだと思います。限られた資源や空間や時間の中から、自分達が生きていくための基本的なニーズを満たすために、皆でシェアしながら暮らしていく。経済システムの中で資源生産性を高めていくというのも一つの手段ですが、そこから降りて、自分達の身近な資源を活用して暮らしを成り立たせていくこともいいと思う。自分達が実践し、次の世代にその背中を見せていくしかないと思うんです。(津田 和俊)

## デザインを専門領域から開放する継続的な活動

議論の範囲が、デザインの領域を超えていると感じた方もおられるかもしれません。しかし、私達はこれまであまりに狭い領域でデザインをしてきたと思うのです。

20世紀後半を通して、デザインという本来誰でもができる行為を専門家が独占してきましたが、今、それを開放する時期に来ています。もし、社会がデザインを必要とするのなら、これからは多様な人が参画し、連携しながらより広く大きな課題に取り組んでゆかなければなりません。デザインが必要とされている世界へどんどん進出してゆくべきではないでしょうか。

今後も、本会議は継続的に実践してゆきます。次回は山形で、さらには海外での開催も考えたいと思います。(益田 文和)



\*ライフストーリー = 特殊樹脂で作られたストロー型浄水器。(ベスターガード・フランドセン社/スイス)

開催告知・報告媒体

ホームページ



ツイッター

今回のサステナブルデザイン国際会議では、試みとしてツイッターを取り入れました。次回以降も継続して活用してゆきますのでフォローをお願いします。

アカウント名 = Destination20XX  
ハッシュタグ = #SUSIM



ポスター



ダイレクトメール



メールマガジン

メールマガジンにて会議開催告知を行いました。また、後援団体の方他、多数の方より告知のご協力を頂きました。引き続き、メールマガジンにて次回会議に関するご案内や関連イベント等の情報をお送りいたします。メールマガジンへのご登録方法は本報告書裏表紙をご覧ください。

■ 本報告書は下記ホームページでも公開しております。  
[www.sustainabledesign.jp](http://www.sustainabledesign.jp)  
■ For English Information, please see our web site.  
[www.sustainabledesign.jp/en/](http://www.sustainabledesign.jp/en/)

英語レポート

オーサ・エルムスタン氏 (スウェーデン) による本会議のレポートです。

Report from the 4th International conference of design for sustainability in Tokyo

Reported by Åsa Elmstam

Introduction

I have been attending to the 4th Conference called "Destination 2009 -2023", which is a conference of design for sustainability. This is an international conference discussing sustainable design issues, possibilities, obstacles, and our actions to achieve a sustainable society as soon as possible. The theme was "social innovation-ing" and the program included reporting activities from the past and reconfirming the direction of sustainability. Sustainable Destination has been held 4 years in a row even though it is 2010 now and not 2009 (changed from before new years to after). I also attended the first conference in 2006 here in Tokyo.

Earlier years had these themes:

- 1# 2006 Finding a way to a sustainable society
- 2# 2007 Theme: Drawing a land map of a sustainable society
- 3# 2008 Steer toward sustainable society

At the conference this year there were around 200 participants from countries like USA, China and me from Sweden and of course Japan. The conference was well organized and everything ran smoothly. The first day we were in *Shibuya* in the *Kuwasawa design school* and on the second day at *Roppongi Midtown* with a nice view of the *Hinoki-cho Park*. The dates was 13-14/3-2010.

The first day

The first day consisted of four lectures by the keynote speakers. (1)

The first speaker, **Mr. Alex Kerr**, is originally from the USA but has lived in Japan for more than half of his life. One of his great interests is Japanese traditional house building techniques and culture such as calligraphy, martial arts and *IKEBANA* and he is working at spreading and preserving it. Alex Kerr questions the Japanese way of building infrastructure, especially in the countryside areas where he thinks that they seldom have respect for the landscape. There is a lot of building going on now. A lot of concrete roads and strange monuments in the forests just so that the politicians have to have something to show, so that people understand they are doing important work.

He talked about strange behaviors like building fabulously ugly fake mountains made of concrete. Building this infrastructure in a more natural way that doesn't affect the nature or destroy the sceneries would be better for everyone. How can forest and hills covered in asphalt attract more tourists to the countryside of Japan? One of the highway building companies slogan is "Kind to people kind to environment". How can that be when they build highways crossing over sceneries on concrete mountains?

This I have to agree with, there is a lot of strange stuff built where you can understand that there is no overall planning of a landscape architect, no attempt of combining areas together which is both good and bad ... For example in Sweden many areas have municipal organizations that are normally called "Skönhetsråd" - which would translate into something like "Beauty Council" that has the last say in every construction matter and are very restrictive about new forms in the already existing public rooms. So people are criticizing Sweden for being a boring architectural country, nothing new and that protrudes too much is accepted. So this is the opposite case of Japan, where you can find exciting combinations and unimagined views. (2)

Alex Kerr was also talking about the utility lines. All other countries have started to dig their utility lines down in the ground, for example China. They are not allowed to have them in the air any longer. But in Japan, "the hi-tech country", the power grid still look like in India. And he was talking about the use of billboards. There are ugly advertising posters even at the temple sites. There has come regulations that have made the situation better but for example China still look much better. He showed an example of the images on front pages on guidebooks. All the countries had beautiful pictures of beautiful houses, things and scenery except for the book about Japan that had a power pole with a tangled lump of electric cord on it.

I believe that Japan needs something like the "Skönhetsråd" of Stockholm (read more; <http://www.stockholm.se/>)

PageFiles/68661/sammanfattning%20eng.pdf). Alex is questioning why the houses in Japan are so badly built. They get mould, they are ugly and the materials used are crappy. In Japan we used to have simple housing made with simple constructions with natural resource materials like wood and paper. But now a days so many things are made out of plastic. Imitations of natural materials like bamboo shaped plastic fences ( 3 ) and making *IKEBANA* out of plastic flowers. (*IKEBANA* is the art of putting together and combining flowers).

To live in the nature in a more traditional way reduces the use of many bad things. He thinks that people feel ashamed of old scenery and old houses etc. And they want to modernize. It results in plain looking houses. All the big cities in Japan look the same and it would be difficult to separate pictures from different cities in Japan from each other.

Me as a Swedish person wonder why there is absolutely no insulation in the windows and in the walls. To have double-glazed windows with good seal that shuts out the cold air is a great way to save energy and lower heating costs. And to have good insulation in the walls makes the temperature nice and hot inside in the winters and opposite in the summer - it stays cool inside in the summer. The natural air without air conditioning is much healthier and not so dry.

Masuda-san later commented in his summary on Alex speech by mentioning the metaphor of cooking the frog. And saying that there are so many shocking stories in Alex's book about how the world is changing.

The next speaker, **Mr. Eisuke Kumano**, founded the Amrita Institute for Sustainable Economies (AISE) and in 2007 he established the *Shinin no Bokujo* open range and dairy farm, also known as La prairie de la forêt (The meadow of the forest). Eisuke spoke about how we live with an economic lifestyle that doesn't make us happy. He made the participants raise their hands if they were close to someone with an allergy or people that might commit suicide. I think everyone raised his or her hand. He says that men are breadwinners, which they do not want to be. People used to share, for example, their timber in villages in past times. Shared values in villages are lost. Community rules have to be changed.

He told us about his company selling milk in old style re-used glass bottles from cows that roam freely in the nature to keep the landscape open. It is eight times more expensive than ordinary milk, but people still buy it. Eisuke can by this prove that it is possible to sell things that are manufactured locally, which is more expensive, but it still sells out with storytelling and a fun experience. Take away the intermediaries and create value for a product - high quality.

I think that we have to transform the concept of design and the designer. It should not be someone who is good at drawing a new car. We do not need more production. What we need is new ways of doing things to change and limit production.

The third speaker was **Mr. Teruo Kurosaki** who started out as an importer of furniture but in recent years has started *IDÉE*, which is a business centered on cultural lifestyles. He is also a teacher at the Freedom University and a culture advisor at United Nations University among many other things.

He spoke about how the first questions between people in Tokyo has become: What company are you working for? And: What is your salary? People used to be happy just by living well and making money. Kurosaki spoke on several areas like homeless people collecting and selling aluminum and living sustainability. He also spoke about changing Tokyo. For example Tokyo has too many restaurants, but too few places where you can relax and feel an inner calm. Tokyo should have hiding places for all those who need it.

**Mr. Yoshiaki Nishimura** did the last lecture for the day. He has written several books - one of them is called "Live alive?". People told me that his presence was unusual since he is quite popular and rarely gives lectures. His main message was: use your strength and time on the things you love!

He also spoke about how you can affect each other just by being. For example watching the Olympic games on TV makes you want to move and exercise.

100-yen shops are filled with so many things but still they are so empty. As a designer we don't want to do that. Value your feelings and hold on to your personal feelings. If you follow the sustainable trend and don't feel for it you will lose your identity. You have to be sensitive to your own feelings.

You should feel things with your heart instead of thinking with the head - it is better. If you do something that you don't want to do you have to shut off your emotions, and that will lead to bad things.

I believe that doing what you want is probably something that lots of Swedish people are quite good at. Sweden always scores high on "individuality" compared to other nations in studies (like this one where, interestingly, Sweden and Japan are surprisingly "close" <http://margaux.grandinum.com>).

se/SebTest/wvs/SebTest/wvs/articles/folder\_published/article\_base\_54)

There is a gap between reality and the way reality is advertised. Noodle shop that portrays itself as something that it isn't. That is what I feel like in this country. Everything is a surprise and I cannot have any preconceived ideas of how things will be or, for example, what that restaurant will serve - because it never actually is the way I first thought.

Yoshiaki Nishimura also spoke about art school and how it shapes students. He asked if it is right to continue with design studies? Aren't there better, more useful things to do?

I think it is important for all professionals to always question whether they are making a meaningful contribution to society or not. And I agree that it is depressing that so many people want to study design and that so many new design schools are started. But the end result and how people use that training is what is most important.

To me it seems as all these lectures are about a future utopia where we might live in new ways. But they all seem to have in common that people should communicate more.

For me Japan has from the beginning been a country of contradictions. It has so many cultural, historic and esthetic values where simplicity and precision is extremely important. (This is well described in, for example, the book "The book of tea" by *Okakura Kakuzo*.) And then there is this hysterical Japanese society with plastic gadgets, collective things, which is really hard to grasp and understand. A society filled with contradictions between plastic, commercials etc vs. tradition and simplicity. And people live somewhere in between...

#### ■ The second day

The second day of this conference was made up of workshops. We had short lectures mostly from companies that already did something that was connected to some kind of sustainable work. And all of us in the audience were having brainstorming sessions in between the presentations to try to develop their ideas into something even better. ( 4 )

The first presentation by **Ms. Chisato Nakahara** (Inakagaisya Tokyo-shiten) was about a network that has been started in the countryside, where the people in a village had been involved in organic plantation. And the question for us to discuss was how to reach out in the cities to sell these organic vegetables and how to create networks to connect the different parts - the countryside people and city people.

People were concerned with the differences between countryside and city. That people live so different lives so that it is difficult to connect with each other. Here I can see a big culture difference between Japan and Sweden, and it is hard for me to fully appreciate the problem. I don't think there is the same cultural gap in Sweden between those kinds of lives compared to what it seems to be like here in Japan. The suggestions people had for solutions to connect the two worlds was among other things to make *manga* (cartoons), which to me was both a bit surprising and strange in this context.

The second subject by **Mr. Yuichi Kiriyama** (ENIGMO Inc.) was *SherMo* ([www.shmo.jp](http://www.shmo.jp)), a web site that works as a meeting place for sharing. Sharing things and sharing economy - they called it SSS - social sharing service. The goods are exchanged between people without money involved just a point system with grades. The people within Japan that need something can borrow it and when he or she doesn't use or need it any more he or she can send it to someone else that wants it. This is a perfect solution for especially books, because you don't need books once you have read them. In this case *SherMo* works like a library, but even more efficient than a public government run library in many ways. And *SherMo* is also very good when working with things used for babies (which you often use only for a short while). A big library of things that is run by everybody. We had a brainstorming session about how *SherMo* could be a place for other goods or activities.

We thought that it would be better sustainability with smaller units within Japan to avoid sending big packages all over the country and also make it possible to meet face to face. Services could also be a part - exchanging services with each other like gardening, hair cutting, babysitting, Internet training etc. And to make the webpage in English as well so that newcomers like myself can use it. In the situation I am in - living abroad just for a short while of some months, it would be brilliant to be able to borrow a bike or a baby bed or a baby stroller for a couple of months. And *SherMo* is a brilliant idea so it would be great if spreads around the world.

In Japan it cost you money to throw thing away. As far as I know there is no place you can go by yourself to throw away big things like furniture. All the rubbish is put out outside your house, and if it is bigger things than household rubbish it cost you extra money.

I believe that garbage sorting and disposal works well in

Japan. People actually do as they're supposed to. But a lot more plastic is being used that wouldn't be necessary in the first place. So then *SherMo* is a much better way of getting rid of your stuff with a feeling of satisfaction and at the same time someone else gets happy.

About garbage - I think it is such a good solution to put on a fee to throw away your things. It might make people think twice before redecorate their kitchen again... but I guess it wouldn't work anywhere else than in Japan. In Sweden people would just dump their rubbish anywhere instead or burn it themselves.

The third session, first presentation by **Mr. Taku Nishimura** (Sow Experience inc.) was a company selling experiences instead of things. They worked mostly in the wedding business. The company is called Sow experience. We had a brainstorming session about what more experiences you could sell. Our suggestion was to have sustainable experiences like living 2 days with no carbon dioxide footprint, using no unnatural things, a 100% carbon dioxide free experience.

Another presentation by **Mr. Takuto Motomura** (Granma Inc.) was focused on products that can be used in development cooperation. The speaker said that Japan doesn't help as much as other countries. Someone said that Japanese aid still builds things that the people don't use, not a modern system. What can Japan do to better help these countries? The solution that my group presented was to export the techniques of building with, for example, bamboo to the countries that also have bamboo forests and plantations. That would be a thought through and sustainable version of "don't give fish, teach fishing".

I think you can export thinking methods and mentality as well. So that everybody actually does recycle right.

It was a good experience for me to participate at the conference even though I wish I knew Japanese to be able to understand everything right!

#### ■ Next year's conference

Next year the conference will be held in *Yamagata Prefecture* instead. There were 7 men from Yamagata city council to represent the city and to invite everybody to next year's conference, which will be held on 26-27 February. Keep an eye on or send an e-mail to secretariat to get more information.



photographed by Åsa Elmstam

## ■ 次回告知

### ■ 第5回サステナブルデザイン国際会議 Destination 2010-2022

次回、山形にて開催

### 第5回サステナブルデザイン国際会議 **Destination 2022** アスティネーション2022 The 5th International Conference of Design for Sustainability

2010年度の第5回サステナブルデザイン国際会議 Destination 2010-2022は**2011年2月26日(土)、27日(日)**に、**山形県・東北芸術工科大学**にて開催いたします。また、2010年12月には説明会を兼ねた東京でのイベントも予定しております。詳細は随時ホームページにてご案内いたします。

[www.sustainabledesign.jp](http://www.sustainabledesign.jp)

### ■ メールマガジンへのご登録

メールマガジンにて、最新情報をお知らせしています。ご登録には、下記メールアドレスへ空メールをお送り下さい。右の登録用QRコードからもご登録頂けます。



[news\\_regist@sustainabledesign.jp](mailto:news_regist@sustainabledesign.jp)

■ 本会議報告書、及び過去に開催した会議の報告書は、下記ホームページにて公開しています。

[www.sustainabledesign.jp](http://www.sustainabledesign.jp)

■ For English Information, please see our web site.

[www.sustainabledesign.jp/e/](http://www.sustainabledesign.jp/e/)

### 第4回サステナブルデザイン国際会議 Destination 2009-2023 報告書

2010年6月30日 第2刷発行

発行： サステナブルデザイン国際会議実行委員会

編著： サステナブルデザイン国際会議事務局

執筆協力： 神坂 礼子、佐々木 恵

写真： 本間 日呂志 [www.h-homma.com](http://www.h-homma.com)

問合せ先： サステナブルデザイン国際会議事務局  
105-0013 東京都港区浜松町 1-22-8  
(有限責任事業組合エコデザイン研究所内)  
TEL. 03-6826-1511 FAX. 03-3578-1459  
[mail@sustainabledesign.jp](mailto:mail@sustainabledesign.jp)  
[www.sustainabledesign.jp](http://www.sustainabledesign.jp)

©2010 The International Conference of Design for Sustainability

